

小学校支援学級担当教員とスクールカウンセラーによる 学校臨床コンサルテーションの実践について

久保 蘭 悦子

1. はじめに

1. スクールカウンセラーによるコンサルテーションの定義と目的

学校現場に心理の専門家であるスクールカウンセラーが赴くようになり、30 年余りとなる。この間、スクールカウンセラーに求められる役割は、社会の変化や自然災害など社会的関心の強い出来事の影響を受けて多様化し続けている。特に現在のスクールカウンセラーは、2015 年の「チーム学校」、2020 年の“コロナ禍”による休校と再開を経て、「チームの心理専門家として一人ひとりの子どもたちを見守るだけではなく、学級集団や学校全体を見守り、問題が起きる前に予防的に関わり、子どもたちや学校コミュニティの持つ力を支えていく、という役割」（久保蘭、2024）をも期待されているといえる。

このような変遷の中でも、スクールカウンセラーの活動黎明期より変わらず中核を担う役割の一つがコンサルテーションである。伊藤（2007）は学校臨床コンサルテーションについて、「教師を介しての『間接的』支援であり、教師・学校と SC の協働、ひいては実践現場と心理学のより密接な協働が前提とされている」と定義づけている。

コンサルテーションとは、もともとコミュニティ心理学の中心的概念であり、コンサルティを通した間接的な援助を指し示すことである（瀬戸・下山、2004）。学校臨床コンサルテーションに関する歴史は、子どもに直接ケアを行うスタッフが日常的な活動の中で子どもの適応上の問題をより効果的に扱うことを目指し、予防的観点（preventive focus）によってアプローチする、精神科医ジェラルド・キャプランの提唱した精神衛生コンサルテーション・モデル（mental health consultation）の流れを汲んでいる（William ら、2008）。ウィリアムらは精神衛生コンサルテーションモデルやジョン・バーガンの行動コンサルテーション・モデル（behavioral consultation）などの伝統的なコンサルテーション・モデルを批判的に検討し、学校現場で直面する児童生徒の学習や適応上の問題に則したアプローチを提供する学校コンサルテーションの統合モデル（integrated model of school consultation）を考案した。そして学校コンサルテーションを「専門家（コンサルタント）が教師を含む関係者（コンサルティ）に関与して児童生徒（クライアント）ないし児童生徒集団の学習および行動調整の改善を達成しようとする協働の心理教育的サービスの過程」と定義している。コンサルタントは、系統的な問題解決、社会的な力、そして専門的な援助を組み合わせ用い、コンサルティを支援する。逆にコンサルティは、学校の実情に応じた介入法の選択と実行の効果評価を通してクライアントを援助する。これらの構造に

より、学校コンサルテーションは、学校組織の機能改善に寄与し問題予防に貢献することができる潜在的な作用を有するという。

日本においては、1975年に米国のコミュニティ心理学の実践から山本が行った学校精神衛生コンサルテーション・プログラムに始まると言えるだろう。山本(1986)は、キャプランの論から「コンサルテーションは、二人の専門家；一方をコンサルタント(consultant)と呼び、他方をコンサルティ(consultee)と呼ぶ、の相互作用の一つの過程である。そして、コンサルタントがコンサルティに対して、コンサルティの抱えているクライアントの精神衛生に関係した特定の問題を、コンサルティの仕事の中でより効果的に解決できるように援助する関係をいう」と定義付けている。そして「コンサルティ側ですでもっている知識や情報を当面の課題解決のためにいかに有効に活用するか」ということと、「地域社会の中にある専門機関という資源に結びつけ、生徒の問題解決をより効果的に促進するためのネットワークづくり」が目的となると述べている。

鶴養(1997)は学校臨床心理士の実践から、「教師へのコンサルテーションの基本は、特定の専門職が職業上の必要性から、他の専門性を持つ専門職に相談することにある」と定義している。また石隈(1999)は、「異なった専門性や役割を持つ者同士が子どもの問題状況について検討し、今後の援助のあり方について話し合うプロセス(作戦会議)」と定義している。

日本中の学校でコンサルテーションの実践が積み重ねられ、スクールカウンセラーの役割や業務が多様化する中でも、コンサルテーションの理論や方法論については黎明期よりほとんど変わっていない。2020年の“コロナ禍”による休校明けの文部科学省からの通達でも、「担任教師をはじめ子どもたちや家族を支援している人たちを支援していくこと」(文部科学省初等中等教育局、2020)とする「支援する人を支援するコンサルテーションの役割」が取り上げられている。スクールカウンセラーは学校という枠組みの中に一人で入り込み、その中にいる子どもたちや保護者、教職員の日常を支えていく。この目的そのものに対しても、学校組織全体や学校のシステムへのアプローチにもアクセスしうる構造においても、コンサルテーションはスクールカウンセラーが行う学校臨床実践の中心的な活動であると言える。

学校現場においては、コンサルティの多くは担任、養護教諭、管理職などの学校教職員であり、保護者が含まれることもある。学校臨床におけるコンサルテーションの目的は、「子どもへの援助というコンサルティの職業上あるいは役割上の課題遂行における問題解決の援助」と「コンサルティの援助能力の向上」の大きく2点が挙げられる(石隈、1999)。また岡堂(1998)によると「コンサルティがみずからの専門的な職業上の困難を克服し、そのことを通して、教職の専門家として成長していくことにおかれる」としている。今現在起きている問題の解決に向けた整理や理解、具体的対応の検討がなされる中で、今後も同じような事例に出会った時により良い援助ができるようになることや、教師の立場から個々の子どもの心の問題や発達、成長についてより深い理解がなされることを目指すということである。

コンサルテーションの構造については、「教師の専門性を脅かさないような、コンサルティへの尊敬の念を含んだ協力関係」をコンサルタントが発展させる必要性を指摘している(Williamら、2008)。その上で、力関係のない相互に尊重し合う関係として「調和的で対等な関係(coordinate, nonhierarchical relationship)」の重要性を強調している。半田(2020)もコンサルテ

ーションが「それぞれの専門性を活かして、相互にそして協力して」話し合いを重ねるという「相互性のある関係における、協働的な活動」であることを重視している。学校臨床コンサルテーションでは、コンサルタントとコンサルティが互いの専門性に対する信頼と尊重を前提に、対等で相互性のある関係を築いていくことが重要となる。それを踏まえると、スクールカウンセラーがコンサルタントで教師がコンサルティという固定した役割に限ることではない。立場が入れ替わる「相互コンサルテーション」という構造も見受けられる（土井・稲月、2024）。コンサルテーションは、ケースや課題、問題を中心に据えて、構造を柔軟に変化させながら問題解決に迫ることができるものである。

2. コンサルテーションとスーパーヴィジョン

学校臨床コンサルテーションは、さまざまな学派やモデルからの定義づけや理論化が試みられているが、現場の実践においては、それぞれのスクールカウンセラーが自らの経験や立場によって身につけてきたやり方に委ねられているところがある。初心のスクールカウンセラーは、初期訓練で学ぶカウンセリングの理論や技法とは大きく異なるコンサルテーションのモデルやスキルを学ぶ機会はほとんどなく、個々の経験や実践によってスキルを身につけている状況である。そのため、カウンセリングやスーパーヴィジョンとの区別が曖昧になり、「コンサルテーションをカウンセリングの姿勢で行ってしまう」（仲田、2009）ことや「コンサルティをクライアントであるかのように扱う」（鶴養、1996）という問題も起きる。

コンサルテーションとスーパーヴィジョンの異同については、山本（1986）も当初より「スーパービジョンと違うのは、スーパービジョンは同一職種の経験のある者と少ない者との関係で成り立ち、スーパーバイザーはケースに対してスーパーバイザーと共に責任をもっているところである」と述べている。スーパーヴィジョンは専門家同士の一对一の関係が基盤となり、特に初心のスーパーバイザーにとっては教育訓練的な意義も強いことから、異なる専門家同士の対等な関係性のなかで問題解決を目指すコンサルテーションの様相とは大いに異なる。しかし、「助言を採り入れるかどうかはコンサルティに委ねられている」点や、「何回か会って話をするうちに、複雑に見えた問題が整理されたり、自身とも対話を深めたりして、相談者は何らかの気づきを得ていく」（武井、2022）点では広義のスーパーヴィジョンの機能とも共通している。

ホロウェイの SAS（Systems Approach to Supervision）モデルに基づいたスーパーヴィジョンのモデルを提唱している平木（2017）によると、スーパーヴィジョンによる教育と実践では「何を考え、何をするかを教えることよりも、何をするかについて問いを発すること」が重要であるという。そして「問いによって参加者の思考、態度、決断、行動が明らかになっていくこと」を強調している。

また、高橋（2024a）は、心理臨床コンサルテーションについて、「心理臨床家（臨床心理士）が、対象となる組織の個人や集団に対して適切にアセスメントをして、他職種の専門家と共に支援方針についての助言を行ったり、継続的な検討を行ったりすること」と定義づけている。助言を行うという側面のみが注目されるべきではなく、専門的な助言という行為の中に、適切なアセスメントや継続性といった心理臨床の専門性を活かした双方向的な支援であることが改

めて強調されるべき点である。また、高橋は「専門的深さやグループの凝集性」という視点から、グループ・スーパーヴィジョンとの共通点も指摘している。そこでは、それぞれの集団の特性やそのなかで起きる個人の問題についてのアセスメントが重要であり、グループ自体の成長へと繋がることの大切さを指摘している。武井（2022）も精神保健看護学における支援者を支援するという視点から、コンサルテーションのグループについて、「問題解決そのものではなく、グループのなかでケアされる経験が大切で、それが患者理解やかかわりを変える景気となる」と指摘している。コンサルテーションを経て、問題解決や事実の理解のみならず、グループのエンパワメントやグループが成長していくプロセスを重視するという見解である。

このように、コンサルテーションとスーパーヴィジョンは明確な違いはあるものの、その機能を理解する上では相互の構造やモデルに関する学びを活かすことができると考えられる。心理臨床実践の蓄積の中で発展してきたコンサルテーションとスーパーヴィジョンについて、その場で扱われる関係性についての学びを通じて、今日の学校臨床に求められるコンサルテーションに焦点を当てることができると考える。

よって本稿では、スクールカウンセラーと小学校支援学級教員を中心としたチームとのコンサルテーション事例について振り返り、現在の学校臨床で求められるコンサルテーションの技術や可能性について考えていきたい。とくに、スーパーヴィジョンの機能という観点で捉えたコンサルテーションのあり方について、スクールカウンセリングの臨床実践でどのように応用していけるか考察していく。

3. 支援学級教員とスクールカウンセラーの協働について

特別支援教育は2007年の法改正により「特殊教育」から「特別支援教育」へと変更されたことが大きな転換点となった。当時の理念としては、「児童生徒等の障害の重複化や多様化に伴い、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育の実施や、学校と福祉、医療、労働等の関係機関との連携がこれまで以上に求められているという状況に鑑み、児童生徒等の個々のニーズに柔軟に対応し、適切な指導及び支援を行う観点から、複数の障害種別に対応した教育を実施することができる特別支援学校の制度を創設するとともに、小中学校等における特別支援教育を推進すること等により、障害のある児童生徒等の教育の一層の充実を図るもの」とされている（文部科学省、2006）。特別支援学校のみならず、地域の小中学校での特別支援教育の充実が明文化され、学校に「個」を見る視点や、関係専門機関との連携の必要性が高まったと言える。

さらに2015年には「専門性に基づくチーム体制の構築」「学校のマネジメント機能の強化」「教職員一人一人が力を発揮できる環境の整備」を柱に「チーム学校」理念が導入された（文部科学省中央教育審議会、2015）。中でも特別支援教育に関しては、「学校や教員が、心理や福祉等の専門家や専門機関と連携・分担する体制を整備し、学校の機能を強化していくことが重要」とし、「チーム学校」を中核に充実を図ることが求められた。特別支援教育とスクールカウンセラーの立場は、学校という集団の中で「個」を重んじる立場であるという共通点がある。また、子どもの発達や心理的な問題に専門性を持つ立場であるということは共通であるが、特別支援教育に携わる教員の構成システム上、その専門性や力量に個人差、地域差が存在するのが実情である。

芦澤・浜谷（2004）は「障害児教育の専門性において、子どもを的確にとらえる力が重視される」とし、中学校障害児学級（当時の名称）での発達臨床コンサルテーションの実践について「発達臨床の専門家による支援が、生徒が示す多様な姿を理解し、そのニーズに担任が応えていく力量の形成につながる可能性」があると報告している。また、特別支援教育における教師の指導困難について論考した別府（2013）によると、例えば小学校低学年においては「児童が集団生活への不適応を起こしている背景を探り、教師が指導困難を抱えがちな多動や衝動的行動に対しては、目の前の行動の解決のみにとらわれないような担任教師へのコンサルテーションが求められる」と提言している。学年に応じた問題背景や子の発達に合わせ、児童理解の深化と教師支援を検討していくコンサルテーションを充実させることが求められているという。

スクールカウンセラーが小学校において支援学級担当の教員と共に児童生徒の抱える問題に取り組んでいく実践は、おそらく日本中で日々積み重ねられている。本稿では小学校支援学級という場の構造にも焦点を当て、スクールカウンセラーの学校臨床コンサルテーション実践について考えていくことを目的とする。

2. 事例の概要

1. コンサルテーションの対象者

P 小学校支援学級担当教員の A 先生、B 先生、C 先生。3 人とも支援学級担当の経験は 5 年以上で、40 代～50 代の女性。A 先生は P 小学校の特別支援コーディネイターを務める。

2. コンサルテーションの構造

P 小学校は山間部に位置する小規模校である。スクールカウンセラー（筆者；以下 SC と記述）は X 年 4 月に P 小のある中学校区の担当となる。

3. 倫理的配慮について

本研究は、京都大学臨床心理学研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 24020）。また、対象の教員に対しては調査目的と内容を説明し、研究協力への同意を得た。さらに、個人や学校が特定されないよう配慮し記述する。

3. 事例

出会いからコンサルテーションの流れに沿って、X 年春～X+1 年春の X 年度の 1 年間を①出会い期、②初期、③中期、④後期に分け、⑤翌年度以降と振り返りを合わせた 5 期に分けて記述する。なお、SC の発言は<>内、その他の人物の発言は「」内に記述する。

1. 出会い期（およそ 1 ヶ月：4 セッション）

P 小学校の教頭より SC へ訪問依頼があり、SC は小学校を訪れた。教頭と A 先生に校長室に迎え入れられ、あいさつと自己紹介の後、具体的な子どもの話題が切り出された。現在 SC に相談したいこととして、Q、R の 2 人の男子児童について、これまでの経緯や困りごとの背景、現在の学校での対応が語られた。

【クライアントについて】個人の特定を避けるため、本論文の目的に沿った部分のみの記載と

する。

Q（高学年男子）：不登校が数年続き、昨年度はほぼ登校できていない。偏食や得意なことへの集中、字を書くのが嫌いなど、教室での一斉指導に馴染まない様子であった。

R（高学年男子）：筆圧の弱さや学習の遅れで中学年時から支援学級在籍。母親と離れる不安が強く、登校渋りや欠席が続いている。

【アセスメントとコンサルテーションの契約】教頭先生と A 先生はベテランの教員であるが、初対面の SC の話にも真摯に耳を傾け、期待と信頼を寄せているように思われた。SC が尋ねたこともすぐに答えられ、普段から丁寧に関わっておられるのだろうと感じた。Q と R の現状をアセスメントし、保護者に対する個別カウンセリングの意義を説明し、保護者の困り感を抱え、共に支えていけるようカウンセリングの提案を行なった。また、「保護者や児童に会ってもらう中で、先生（SC）に対応を教えてもらいたい」という申し出があり、支援学級担当教員 3 人と定期的に話をしていく方針が定まった。SC はカウンセリングや観察のフィードバックという目的だけの時間にならぬよう、クライアント中心のコンサルテーションの形をイメージし、＜個々の問題を皆で一緒に考えていける時間に＞と提案した。学校側の“SC に教えてもらう”という申し出については、当初ははっきり否定しないでおいた。

【クライアントに対する SC の見立てと対応】すぐに Q と R の保護者とのカウンセリングが始まった。Q 保護者に対しては、Q が特性に合った支援を受け学校生活を送れるよう、学校と細やかに連携していくことを確認した。R には、まずは R が母と離れても安心して学校にいられることを目標にし、健康面や生活面については医療や福祉などの外部資源の利用を提案した。また、保護者にも教員と SC とのコンサルテーションの意義について説明し、カウンセリングで扱った内容のうち共有すること・しないことを話し合った。

【初期のコンサルテーション】A 先生が中心となり Q と R に登校後支援学級で過ごすことを提案した。R は母と一緒にならば登校できる日が増え、Q も少しずつ登校するようになった。3 人の教員からは「どう声をかけたらいいか」「何をして過ごさせたらいいか」等の具体的な相談があった。児童は 2 人とも何か不安なことがあるとすぐに休んだり、帰ってしまったりで、腫れ物に触るような手探りの対応が続いていた。保護者も一喜一憂し、「また不登校が続くのでは」という不安や焦りが見られた。SC は基本的に先生方の関わりを支持するだけで、＜2 人にとっては大きな一歩。焦らず、それぞれのペースを尊重して見守っていきましょう＞と毎回伝えた。また、保護者との守秘義務の話し合いの上、共有を希望された情報を扱うことを説明し、学校と保護者が足並みを揃えていられること、信頼関係の構築を最優先にと提案した。

【コンサルテーションの場に対する SC の見立てと対応】3 人の教員たちは受容的な関わりをしていたが、「児童の思いを受け容れるばかりでいいのか」と自信のない様子であった。校内の立場もあり、何より保護者から向けられる不安や焦りを引き受けているようであった。グループ内では、A 先生がリーダーシップをとっているが、経験年数や立場の違いもあり、A 先生は他の 2 人に配慮していた。普段からよく話し合っていたが、コンサルテーションの場で初めて知ったという内容もあった。今後関係が深まるにつれ、お互い言いにくいことが出来れば、SC の介入が重要になるだろうと感じられた。まずは日々の報告を聞き、毎日関わっていると捉えづらいつクライアントの変化や成長に焦点づけ、効果があった支援を共有する場とすること、ま

た先生方の日々の関わりをエンパワメントしていくことを目標とした。

2. 初期（およそ3ヶ月：4セッション）

Rは母の付き添いがあれば落ち着き、QとRはお互い励まし合い支援学級で一日を過ごせる日も増えていた。保護者の来談も安定し、それぞれ教員とも信頼関係が出来ていた。コンサルテーションの場ではQとR、それぞれの保護者との人間関係の不満や葛藤のエピソードが話題の中心となった。教員たちは問題が起きるたびに3人で話し合い役割分担し、丁寧に解決に導いていた。しかし、「もう高学年なのに」という焦りや、Rの母に負担をかけている罪悪感など、日々の接し方への戸惑いや自信のなさは引き続き語られた。3人の教員の間でも、例えば連絡ミスで異なる指示をして児童が不安になり、B先生とC先生はA先生の意図を汲んで声かけができなかったと謝罪や反省を口にした。SCは細やかな配慮を支持し、先生方の焦りや戸惑いに共感し、関わる時間が増えることで起きる葛藤は必然であると伝え、人間関係の中で起きることの意味、児童の変化や成長に焦点づけた。教員からも「保護者もきっと不安。一緒に不安を抱えて、今は見守っていくしかない。」という発言もみられるようになった。

3. 中期（およそ3ヶ月：7セッション）

Rは登校途中で母と別れて終業まで過ごせるようになった。2人とも支援学級への登校が安定し、現在の困り事というより、“将来を見据えて今つけてあげられる力は何か”という話題が多くなった。教員たちはそれぞれの児童に合わせて将来の夢や目標、中学校生活などの近い将来への意識づけを高める関わりを始めた。教員たちは丁寧な準備をし、話し合いを重ね、その子ができること、頑張りたいことを尊重し励ました。葛藤や反発も経つつ、2人は課外活動に参加したり、学習に取り組むようになるなど、手応えのある変化が見られた。コンサルテーションに学級担任や管理職、養護教諭が出席する回もあった。そこでは教員たちが中心となって議論が進み、SCはほとんど日々の丁寧な関わりを支持しているだけであった。3人の先生たちも「意外とうまくやれていた」とお互いに認め合うことが増えた。日々の報告では児童や保護者の不満や葛藤のエピソードが多くを占め、学校が板挟みになることもあったが、SCはく自分自身を考えていく過程で、周りとの思いのズレが生じるのは当然と、2人の成長過程にとって大切な作業をしていることを意味づけ、エンパワメントに務めた。医療機関や福祉との連携も始まり、各機関にどのようなサポートを依頼していくかについても話し合われた。

4. 後期（およそ4ヶ月：8セッション）

児童たちは一度参加できた活動に参加できなかったり、大きな不満が噴出し欠席が続いたりなど一進一退の様子であったが、当初のような焦りが語られることは減っていた。教員にも保護者にも「少しでも本人が自信を持って学校生活を送れることが何より」という共通認識が生まれているようであった。年度末に近づくと、来年度を見据えた話題が中心となった。春からのそれぞれの児童の変化や成長を語り合い、SCの視点からの見解も述べた。教員たちも肯定的な意味づけを受け止め、それを本人や保護者とも共有していると報告された。翌年度の体制構築や連携についても、担任や管理職を交えて丁寧に話し合い準備した。

5. 翌年度以降と振り返り

翌年度はコアメンバーに養護教諭も加わり、コンサルテーションの形を継続した。必要に応じて頻度やメンバーは増減しながら、この形の関わりは数年継続した。

数年後、振り返りとして3人の教員に初年度のコンサルテーションについて語ってもらった。そこでは、「コンサルテーションの場に支えられた」という共通の感想が語られた。また「この場で一週間を振り返ることで変化や成長を実感できた」「定期的実施することで次までの目標や課題が明確になった」「変化がなく停滞しているときほど振り返る機会の意味を感じた」

「SCの言葉で日々の関わりに自信を持てた」と語られた。SCからも、日々の丁寧な関わりとP小ならではのチームワークに支えられていたと感謝を伝えた。

4. 考察

1. 本論文におけるコンサルテーションの特徴

本事例のコンサルテーションは、定期的な開催により定点観測の意味合いや、「作戦会議」(石隈、1999)のニュアンスが強いものであった。またSCもクライアントと直接関わり、ケースの責任を持ちながらコンサルテーションを行う「クライアント中心のケース・コンサルテーション (client-centered case consultation)」(山本、1986)の様相を呈していた。保護者とのカウンセリングとコンサルテーションが併走し、定期的な同じメンバーで集まり話し合うことで、子どもたちの日常に関わる教員を支える役割を担った。教員にとっては、日々の関わりを振り返り整理する場であり、児童について改めて深く考える場であったと言えるだろう。

本事例のコンサルテーションのきっかけは、教頭からの依頼で始まった。時間、場、メンバーを固定し安定した枠組みの中でコンサルテーションが継続できたのは、管理職の理解と信頼によるものが大きい。Gregら(2012)は管理職の支持を得、管理職と肯定的な協働関係をつくるのがコンサルテーションプログラムの土台になると述べている。教員の業務や役割が多様化し、多忙を極める中で、教員たちがスクールカウンセラーと話し合うために時間を割き、優先的に取り組むことを後押ししてくれたのは、管理職の思いや子どもたち一人ひとりの心を尊重する学校方針に他ならない。スクールカウンセラーは学校運営に心理の専門性をどう役立てていけるか提示し、管理職との信頼関係に努めることが重要であると言えよう。

また、事例では当初、教員たちは「SCに教えてもらう」「アドバイスをもらう」という姿勢であり、SCもコンサルテーションの契約時には対等性や相互性に言及しなかった。それは学校の人々に「理解され、歓迎され、学校教育の一環として円滑に機能すること」(鶴養、2016)を優先し、まずは教員(学校)の意向を受け入れる意思を示した為である。コンサルテーションの機会を積み重ねる中で、SCは直接的なアドバイスを控え、対等で相互的な関係の中で共に考える場となるよう働きかけた。この関係性が構築されることでコンサルテーションの場が機能し、先生方は「場に支えられていた」という感覚を抱いたのではないだろうか。コンサルタンは、コンサルティや現場を見立て、コンサルティと共に考えていける場となるよう、自らの動きを調整し関係性を整えていく必要がある。

2. 学校臨床コンサルテーションの意義

本論文では、P 小学校でのコンサルテーションの実践から、学校臨床コンサルテーションの持つ機能や役割についていくつか重要な要素が示唆された。本事例をもとにした学校臨床コンサルテーションの構造を図 1 に示す。

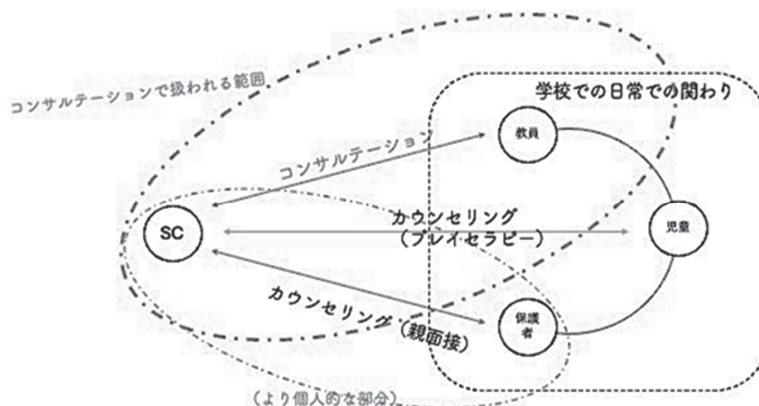


図 1 学校臨床コンサルテーションの関係性と扱われる内容の構造

学校組織には多くの人が関わり、児童に関わる人間関係も複雑である。スクールカウンセラーは学校の内側に入り、学校教育に関わりながらも、外部性を保った立場にいることが重要である。コンサルテーションは児童・保護者・教員の日常を支えるための場であり、児童を中心に、それぞれの思いを交通整理し、焦りや不安に流されないよう子どものペースを守る役割、日々起きる葛藤に教員が耐えるためのエンパワメントの役割を担っている。コンサルタントとしてのスクールカウンセラーは、教員の日常の関わりを支持し、子どもの変化や成長に焦点づけ、効力感を持って関わってもらうことを支える。特に、小学校支援学級という現場では、合理的配慮のもと子どもの個別性に応じた関わりが基盤となるが、個々の教員の経験や能力によって具体的な支援に差が生まれやすい。多くの業務を抱える日常の中で、一人ひとりの児童への支援を検討する場は時間的にも内容的にも不足しているといえるだろう。別府（2013）は特別支援教育における「教員及び教員集団が有能感をもてるコンサルテーションの必要性」を指摘している。日常の関わりを子どもたちの肯定的な変化や成長、今後の見通しへと結びつけ、価値づけることや、学校外の連携も含めた支援ネットワーク全体の一員であることを意識化することは、教員を孤立させず、日常の関わりに効力感を抱いてもらうことに繋がる。

これらのためにも、スクールカウンセラーは「学校に呑みこまれず、埋没せず、その役割を果たすために、SC の『内的な権威』すなわち深い専門性に裏付けられた在り方」（福田、2016）をより意識する必要がある。とくに、守秘義務によってコンサルテーションで扱う範囲を明確にすることで、保護者とのカウンセリングの場でより深いテーマを引き受け、重層的にケースを支えていくことが可能となる。この観点においても、スクールカウンセラーは学校組織の人間関係の葛藤に巻き込まれず、自分の役割や立場を明確にすること、心理臨床の専門性に基づ

いた見通しをもち、限界についても自覚的であることがより重要となる。

ただ、非常勤が主流の現在のスクールカウンセラーの働き方では、P 小学校での事例のように安定した定期的なコンサルテーションの機会を持つことが難しい場合も多いだろう。また当校の教員の姿勢や専門的スキルの高さ、管理職のマネジメント、職員同士の関係性や職員室の雰囲気など、当校の持つポテンシャルの高さが、有意義なコンサルテーションを継続できた要因でもあった。これらはスクールカウンセラーとの協働を生かす学校組織の在り方という点で重要な示唆を与えてくれたが、さまざまな現場に応じて、その場の資源を生かしてコーディネートしていくことが学校臨床の要であると言える。

3. 子どもの成長を支える器として機能すること

特別支援学級は、そこに在籍する子どもにとっては日常の場である。支援学級の教員は日常で起きる問題、人間関係の葛藤、成長発達に関わる課題について、日々悩みながら対応し、子どもたちの日常を支えている。コンサルタントとしてのスクールカウンセラーは、先生たちの悩みや思いに共感し、具体的なエピソードを取り扱いながら、コンサルティ自身が持つ専門性を生かした関わりを支持する。そうすることで、日常の中では焦点化しにくい個々の変化や成長が浮かび上がってくる。クライアントにとっては、コンサルテーションは成長を支える器として機能すると言えるのではないだろうか。

子どもたちの成長の場を支える人、つまり支援者を支援する「ケア (care) の働き」の視点も重要である。武井 (2022) は精神保健看護学における支援者を支援するという視点から、グループで行うコンサルテーションについて「問題解決そのものではなく、グループのなかでケアされる経験が大切で、それが患者理解やかかわりを変える景気となる」と指摘している。支援者にとっての危機や燃え尽きを回避し、自信を持って関わることを支持することが大切で、全ての参加者にとってコンサルテーションがエンパワメントの場になると指摘している。

一方で、起きることの全てが肯定的な変化や成長に繋がっていくわけではない。森岡 (2024) は、学校臨床におけるスーパーヴィジョンについて「学校に居場所を見出しにくい子どもや保護者の傷つきや無力感に触れ、子どもの傍に居続ける」スクールカウンセラーの抱く「無力感を支える」働きに言及している。子どもの日常に関わることは、時には失敗や停滞、無力感を突きつけられるものである。コンサルテーションの場は、必ずしも肯定的な面だけではない部分も抱えていくことができる。教員の抱いた痛みや苦い思いにも共感し、グループの中で支えていくことが、傷つきを抱えてもなお自信を取り戻して子どもの日常に関わっていくことを支える働きとなると言えよう。

4. スーパーヴィジョンの機能を活かしたコンサルテーションの技術

最後に、コンサルテーションとスーパーヴィジョンとの異同は先述した通りであるが、スーパーヴィジョンの機能について学校臨床コンサルテーションに必要な要素という視点で考えていきたい。平木 (2012) はスーパーヴィジョンの機能として、「モニターと評価、指導と助言、モデリング、相談、支持と分かち合い」の5点を挙げている。そしてその場に上下関係、力関係は存在するが、「事実の発見や問題解決は助言を中心とするよりも、協働参加の形で行われる

ことが望ましい」としている。また「共感的関心、励まし、態度などに対する理解を分かち合うことで、深い関係のレベルで支持を示すことができる」機能に着目している。これらはスーパーヴァイザーとしての心構え、態度が関係し、より良いスーパーヴィジョンの展開には、スーパーヴァイザー固有の価値観、評価、能力などが反映するという。コンサルテーションにおけるコンサルタントも、クライアントを支えるコンサルティ自身の気づきを促し、関係を築くことで深いレベルで「支えていく」働きを担う。関係性の質は異なるが、コンサルティ自身の専門性向上を支えるという共通の目標のために、スーパーヴァイザーの立場や態度、場の在り方などのスーパーヴィジョンの機能を生かすことが有効であると言える。

中でも重要な要素の一つが守秘義務に関する取り扱いであろう。竹森（2019）は学校臨床における守秘義務について「個を尊重しつつ職種をまたいで子どもや家族の情報を共有する上での要」とし、守秘義務に関するやりとりこそが「相談者をウチとソトから支援することにつながる」と述べている。コンサルタントは、場の構造を理解し、役割を明確化し、枠組みを作る。クライアントに対しては、多くの人の思惑が立ち現れる中で、児童や保護者の想いや立場を尊重し、彼らの主体性を第一に考える立場である必要がある。複雑な人間関係の中で「秘密を守ることを」を丁寧に取り扱い、信頼関係を構築することが、専門性の要であると言える。

もう一つは、クライアントや支援チームの可能性を探ること、心理アセスメントの専門性を重視することである。野々村（2001）は「コンサルテーションの原則を踏まえながらもその枠にとらわれない柔軟性と、見立てとアセスメントによる安定性という、両面の感覚を持ち合わせていること」が重要だと指摘している。また高橋（2024b）は重層的なクライアント理解には発達特性やパーソナリティ特性の理解が必要であるが、「そこにとどまらず、それらを補うべく働く機能を見出し、治療可能性、教育によって伸ばす力を見出すこと」が重要であり、「問題理解と共に治療・教育可能性を見出すという目的の「両輪」があって初めて、治療や支援に活かされる」と指摘している。クライアントのみならず、支援チームや組織・場を見立て、それらが持つ力を見出し可能性を探ることは、コンサルタントの重要任務であり、心理臨床の専門性の要であるアセスメントのスキルが問われるものである。スクールカウンセラーは、個別のアセスメントスキルは勿論、組織や集団に対するアセスメントの力を身につける必要がある。

皆藤（2014）はスーパーヴィジョンにおけるスーパーヴァイザーの臨床経験として、「心理臨床観・人間観がスーパーヴィジョンの *here and now* にリフレクトされていくものでなければならない」と述べている。そして事例におけるクライアントと心理臨床家の「関係の振動・揺らめき」すなわち「事例に機能するところ」に寄り添うことの重要性を指摘している。学校現場でのコンサルテーション実践においても、スクールカウンセラー自身が事例や場に対し謙虚な姿勢で学び続け、クライアントやコンサルテーションの場を見立てる「臨床的想像力」を養っていくことが重要である。個々の学びにおいても、また個々の活動が基盤となる学校臨床全体においても、その専門性と独自性をより追求していく必要があるのではないだろうか。

5. 今後の課題

学校臨床におけるコンサルテーションは、歴史的にも実践的にもその重要性和ニーズの高さに比べ理論化や実証的研究の積み重ねが不十分であり、さらなる研究の継続が求められている。

コンサルテーションの目的や機能、モデルについて正しく理解し、必要なスキルを身につけていくことと共に、スクールカウンセラーが提供するコンサルテーションはどのような支援・サービスであるか、学校側へ理解してもらう働きかけも課題の一つである。

また、スクールカウンセラーの外部性を活かした関わりの利点と同時に、その限界についても意識しておく必要がある。学校組織の中で、どの部分に焦点を当てて関わっていくことができるか、効果と責任の範囲を自覚しておくことも重要である。

現場でのニーズの高まりに応え、学校臨床コンサルテーションの技法を実践的に学ぶ機会を創出すること、初期教育や専門教育において発展的に学べる機会を設けることが今後の課題となるだろう。学校臨床の独自性に呼応したスーパーヴィジョンの充実に向けた取り組みとも並行し、コンサルテーションを支えるスーパーヴィジョン、スーパーヴィジョンの機能を活かしたコンサルテーションの、相互的な発展が期待される。

謝辞

ご指導くださいました高橋靖恵先生に御礼申し上げます。研究協力を快諾して下さった P 小学校の関係者の皆様、ご協力頂いた先生方に御礼申し上げます。

7. 文献

- 芦澤 清音・浜谷 直人 2004 中学校障害児学級への発達臨床コンサルテーションによる支援 特殊教育学研究 第 42 巻 pp.133-144
- 土井 裕貴・稲月 聡子 2024 スクールカウンセラーによる小学校担任教員への支援効果 教育心理学研究 第 72 巻 第 1 号 pp.57-68
- 福田 憲明 2016 チェンジエージェントとしてのスクールカウンセラー 子どもの心と学校臨床 第 15 号 遠見書房
- 福田 憲明 2022 新しい時代におけるスクールカウンセラーの業務と課題 心理臨床学研究 第 41 巻 第 3 号
- グレッグ・ブリッグマン, フラン・ムリス, リンダ・ウェッブ, ジョアナ・ホワイト 谷島弘仁 (訳) 2012 学校コンサルテーション入門—よりよい協働のための知識とスキル 金子書房
- 半田 一郎 2020 スクールカウンセラーと教師のための「チーム学校」入門 日本評論社
- 平木 典子 2017 増版改訂 心理臨床スーパーヴィジョン 金剛出版
- 別府 悦子 2013 特別支援教育における教師の指導困難とコンサルテーションに関する研究の動向と課題 特殊教育学研究 第 50 巻 第 5 号 pp. 463-472
- 武井 麻子 2022 支援者を支えるコンサルテーションとスーパーヴィジョン こころの科学 第 222 号 pp.26-31
- 石隈 利紀 1999 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 伊藤 亜矢子 2007 学校臨床心理学—学校という場を生かした支援 北樹出版
- 皆藤 章 2014 スーパーヴィジョンにおける臨床性 皆藤 章 (編) 心理臨床実践におけ

- るスーパーヴィジョン—スーパーヴィジョン学の構築 日本評論社
- 久保 蘭 悦子 2024 学校臨床におけるスーパーヴィジョンの機能 高橋 靖恵・西 見奈子
(編) 心理臨床に生きるスーパーヴィジョン その発展と実践 日本評論社
- 森岡 理恵子 2024 スクールカウンセリングにおけるスーパーヴィジョン 高橋 靖恵・西
見奈子 (編) 心理臨床に生きるスーパーヴィジョン その発展と実践 日本評論社
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 2006 特別支援教育の推進のための学校教育法等
の一部改正について (通知)
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 2015 チームとしての学校の在り方と今後の改善方策
について (答申)
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 2020 児童生徒の心のケアや環境の改善に向けたスク
ールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーによる支援の促進等について
- 仲田 洋子 2009 コンサルテーション技法を含むカウンセラー養成プログラムの開発 (その
1) 新米心理士の抱える苦悩と課題 駿河台大学論叢 第 39 巻 pp.139-160
- 中村 美穂 2008 学校臨床心理士が子どもの問題状況に応じて活かす学校や教師とのコンサル
テーションに関する文献検討 九州大学心理学研究 第 19 巻 pp.79-86
- 野々村 説子 2001 学校教師へのコンサルテーション 心理臨床学研究 第 19 巻 pp.400-
409
- 岡堂 哲雄 1998 スクール・カウンセリング—学校心理臨床の実際 新曜社
- 瀬戸 瑠夏・下山 晴彦 2004 日本におけるスクールカウンセリングの現状分析: 文献レビ
ューによる活動モデル構築への展望 東京大学大学院教育学研究科紀要 第 43 巻 pp.133-
145
- 高橋 靖恵 2024a 心理臨床スーパーヴィジョンの展開と課題 高橋 靖恵・西 見奈子
(編) 心理臨床に生きるスーパーヴィジョン その発展と実践 日本評論社
- 高橋 靖恵 2024b 心理臨床実践において「伝える」こと セラピストのこころの涵養 福村
出版
- 竹森 元彦 2019 日本におけるスクールカウンセリングの事例報告から見たその特徴と実践
知の検討 京都大学大学院教育学研究科紀要 第 65 巻 pp.67-79
- 鵜養 美昭・鵜養 啓子 1997 学校と臨床心理士—心育ての教育をささえる ミネルヴァ書
房
- 鵜養 美昭 2016 これまでの SC とこれからの SC 子どもの心と学校臨床 第 15 号
- ウィリアム・P・アーチュル, ブライアン・K・マーテンズ 大石 幸二 (監訳) 2008 学校
コンサルテーション 統合モデルによる特別支援教育の推進 学苑社
- 山本 和郎 1986 コミュニティ心理学: 地域臨床の理論と実践 東京大学出版会

(臨床実践指導者養成コース 博士後期課程 3 回生)

(受稿 2024 年 9 月 2 日、改稿 2024 年 11 月 18 日、受理 2024 年 12 月 19 日)

小学校支援学級担当教員とスクールカウンセラーによる 学校臨床コンサルテーションの実践について

久保 蘭 悦子

本稿は、小学校支援学級担当教員との臨床実践を通じて、スクールカウンセラーが現在の学校臨床で求められるコンサルテーションの技術や可能性、特にスーパーヴィジョンの機能という観点で捉えたコンサルテーションの在り方について考察を行った。その結果、まずはコンサルテーションの枠組みや構造を正しく理解し、伝統的な対等性や相互性に支えられた関係を築くこと、またコンサルティである教員をエンパワメントし、自己有能感を支えること、ひいては学校組織全体の問題解決能力を高め、多職種連携の基盤となるようマネジメントすることが重要であると考えられた。また、支援学級という場を生かし、子どもの成長を支える器として機能することや、スーパーヴィジョンの機能を生かしたコンサルテーションを展開させることで、心理臨床の専門性に根ざした学校臨床独自のコンサルテーションとスーパーヴィジョンを相互に発展させることができると考えられる。

Practice of School Clinical Consultation by Elementary School Support Class Teachers and School Counselors

KUBOZONO Etsuko

The purpose of this paper is to examine the techniques and possibilities of consultation required by school counselors in today's school clinical practice, especially from the perspective of the function of supervision, through clinical practice with teachers in charge of elementary school support classes. As a result, it is important to first understand the framework and structure of consultation, to build relationships supported by traditional equality and reciprocity, to empower teachers who are consultants, to support their sense of self-competence, and to improve the problem-solving skills of the school organization, and to manage them so that they become the foundation for interprofessional collaboration. In addition, by taking advantage of the place of the support class to function as a vessel to support the growth of children and to develop consultation that makes use of the function of supervision, it is possible to mutually develop consultation and supervision unique to school clinical practice rooted in the expertise of clinical psychology.

キーワード：スクールカウンセラー、コンサルテーション、スーパーヴィジョン

Keywords: School Counselor, Consultation, Supervision